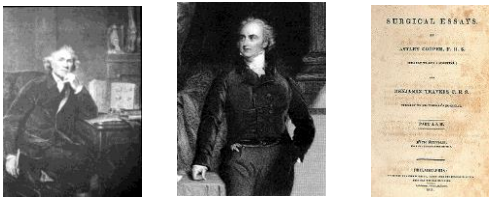


甲状腺外科草子 8

獅子の心と鷹の目：クーパー

杉野 圭三

ヨハン・シュルテス (1595-1645) やローレンツ・ハイスター (1683-1758) 以降、英国ではジョン・ハンター (John Hunter, 1728-1793) が解剖学、外科学を発展させた(「血液、炎症及び銃創に関する研究 (1794)」)。ハンターは好奇心旺盛で人体解剖だけでなく各種動物との比較解剖学にも興味を持ち、自分の家に小動物園を作るなど、多くの伝説・奇行が伝えられている。



ジョン・ハンター アストリー・クーパー Surgical essays (クーパー)

アストリー・クーパー (1768-1841) はハンターの解剖学の講義を受け、深い感銘を受け、外科学を更に発展させた。

クーパーに関して、柳澤波香氏の発表に詳細が記してあるので概略を引用する。

『イングランド東部ノーフォーク州に牧師の四男として出生、ロンドンのガイ病院などで外科修練を行い、1798年にはヘルニア、気管支閉塞に関する論文を発表した。クーパーは先ず、外科医としてのあるべき資質(治療の手際良さ、マナーの大切さ、冷静さ、患者の苦しみの軽減)を説いた。さらに、安全な手術のためには解剖学の正確な知識が必要不可欠である旨を強調し、詳細な解剖スケッチを著書 Principles and Practice of Surgery の中に残している。「解剖の知識が不十分な外科医による手術は、患者の死、訴訟のリスク、外科医自身の恥になる」と講義の中で警告し、成功の見込みのない手術は行わないことと戒め、外科医の心得として「己の欲するところ

を人に施せ」というマタイ伝の文言を引用した。病院実習の心得やマナー、多数の症例を診る重要性、生理学の知識や諸科学への関心、外科と内科の協力関係、薬に関する知識などの必要性と重要性を言明した』

クーパーの言葉で最も有名なのは、『外科医に必要な資質は鷹の目、獅子の心、女性の手である』といったことである。

外科医は手術中に血管・神経の走行、剥離層の識別など瞬時に見極める力が要求される。画家ルノワールも次の言葉を述べている、『先入観無く描くこと、画家にとって大切なのは手ではない、それは眼だ。眼が画を作るのだ』。

津田青楓画伯にも同様の言葉がある、『諸君はあれを描くのだと思うと大間違いだぞ、観るのだ、見つめるのだ。見つめている内にあるような物が見えてくる』。



リチャード1世



黒騎士 (1952)



アイヴンホー

外科手術では、「鷹の目」と同時に強い精神力が要求される。英国人は「獅子の心」が大好きなようであり、スコットの「アイヴンホー」や映画「黒騎士」に出てくる獅子心王リチャード (1157-1199) は英雄として描かれている。外科医に要求されるのは、不測の事態に動じない獅子のような不動心と臨機応変な対応力であり、小生のような「ウサギのような小心者」には重い課題である。

参考文献

1. 小川鼎三。医学の歴史。中公新書
2. スーランド。医学をきずいた人々。河出書房
3. 柳澤 波香。外科医アストリー・クーパー卿の教え
第 118 回 日本医史学会総会
4. スコット。アイヴンホー、河出書房、1966

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2021年11月25日